

八尾歴史物語

六十五巻

文化財と観光① 江戸時代の旅（前編）

江戸時代、街道や宿場の整備が進みました。移動が制限された庶民であっても、旅の目的が寺社への参詣であれば、幕府から旅を認められました。その道中で各地の名所を観光しながら、寺社をめざすことが多かったようです。今回は、当時の旅のありようを示す、神社や村の出入口などで常夜灯^{じょうやとう}として使われた市内に残る石灯籠^{とうろう}を紹介します。

「一生に一度はお伊勢参り」と言われるように、江戸時代の旅の行き先のほとんどが伊勢神宮に参詣する「伊勢参り」でした。慶安3年（1650年）から約60年ごとに特に規模が大きく、より多くの人々が訪れた「おかげ参り」が起きました。

参詣は一人でするのではなく、「講^{こう}」と呼ばれるグループをつくり、旅に必要な費用をまとめ、講の中から代参者^{だいさんしや}を決めて寺社を参詣しており、市内でも村々で伊勢講が組織されました。

旧大窪村の御祖神社^{みおや}跡に、おかげ参りを記念して建てられた「おかげ灯籠」があります。最も参詣者が多かったとされる文政期のおかげ参りの翌年の天保2年（1831年）に建てられ、台座に「おかげ」と刻まれた市内で唯一のものです。火袋の下の中台には伊勢神宮を示す「太神宮^{じんぐう}」と刻まれています。

その他にも伊勢信仰を示す伊勢灯籠が残っており、玉祖神社にある文政四年（1821年）の「大神宮^{だいじんぐう}」銘の灯籠は、石組み基壇の上に乗る高さ6メートルにもおよぶ立派なものです。伊勢参りが村にとって重要な行事であったことがわかります。

（つづく）



▲旧大窪村のおかげ灯籠

問 観光・文化財課

TEL 924・8555

FAX 924・3995